

---

# The Last Battle

八剣太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

The Last Battle

### 【Nコード】

N0269E

### 【作者名】

八剣太郎

### 【あらすじ】

2050年TOKYO。>吸血鬼狩り<を生業とするヴァンパイアのミレンダーは、元朝倉の残党組織>狂宴<へ決着をつけるため、戦いへ赴く。【シャドウランTRPG第二版（！）ルールを元にした小話です】

「……ひとりで来たのか？　まあ、私が見があるのはお前だけだから都合だが、ミレンダー」

ざわざわと吹き上げた風が、男のあまりにも完璧すぎる銀の髪と黒いコートをたなびかせた。

かつての全日本自由労働者連合会、今は>狂宴<と名乗るテロ組織の幹部、>闇<の使い、ルウィード。彼もまた自分と同じく、朝倉の元研究員であり、H M V ウイルスの感染者だった。H M V ウイルスは、感染者に肉体の不老と再生能力をもたらすが、自ら生存に必要なエネルギーを作り出せないため、常に何らかの形で人の精力の摂取が必要となる。故に、感染者は、「人」ではなく、「ヴァンパイア」と呼ばれるクリッターへ分類された。

年上に見えるルウィードは、本来なら自分より年下だ。「東京紛争」後、朝倉が開発したものをさらに改良したウイルスに自ら望んで感染した、という。自分は不自然なあどけなさの残る姿で止まってしまったが、対してルウィードは人間として一番力溢れる時期を意図的に止めたのだ。その隙のない力満ちた優美な姿は、どれだけ魅力的に人の目に映るのだろう。>狂宴<の4人の幹部の内、最も多くの人々を破滅させたのがこの男であることは、間違いない。

ミレンダーはヘビー・ピストルを抜いて、ルウィードに向けた。「お前には……これ以上、僕の何ものにも触らせはしない、ルウィード」

ミレンダーは間髪を入れずに引き金を引き、弾丸は真っ直ぐに男の頬を抉った。しかし、鮮血を飛ばしながら男は微笑んだ。

「拳銃か？　無粋じゃないか、お前と私の仲なんだ」、ルウィードの顔はすぐに元の通り、傷がふさがり肉が戻った。「もっと相応しい遊び方があるだろう！」

マナの奔流が敵意あるものとして、矢のように放たれる。ミレン

ダーは咄嗟に両腕で己を庇った。激しいエネルギーがぶつかり合い、消滅する。

「……そうだ、お前のおもちゃはその>霧くだったな」

ミレンダーに人工的に与えられたH M V Vウィルスは、マナを操る呪文は与えなかったが、一方で精霊を使役する力だけは残された。「私達に似合いのおもちゃじゃないか、うん？ クライストは>光くを操るが、私が操るのは>闇く。お前の>霧くは>闇くにこそ親しく、似つかわしい。そうは思わないか？」

ルウィードの側に、漆黒の塊が実体化した。

「僕はお前に支配されるつもりはない！」

「支配？ 違うよ、ミレンダー。一体化、といった方が相応しいだろうか。私達はひとつになるのだ、お前と私で共に歩むのだよ。この地は、私達のものとなる、私達にはその王となる力がある」

ことさら強調された人称に、ミレンダーは苛々した。

「お前と僕は違う」

「いつまで我儘を言うつもりだ、ミレンダー。真実に抗ったところで何が変わるわけでもない。お前と私はこの世で唯一同じものなのだ、いい加減に認めるがいい」

「我儘を言っているのはお前の方だ！ 『俺』は、お前がそうなる何年も前にオリジナルのウィルスに感染して唯一生き残った『オリジナル』なんだよ！ お前のような格下の劣化コピーとは訳が違う」

「……ほう」

ルウィードは目を細めた。「面白いことを言うようになったな」

「……僕は、お前を、僕の存在全てをかけて倒さなくてはいけないんだ」

「何故そんな哀しいことを言う？ 私達が解り合えば、全てはうまくいく。溯も朝倉も関係はない、力ないただの人間達からこの街を取り上げ、私達が生きるに相応しいものに変えてゆくことができるのだ、それこそが私達が望んだ未来だろう？ 何も難しいことなどない、それなのにお前は戦うことを望むのか？ 血生臭い未来を」

ミレンダーの背後にあった霧の精霊はゆらりと立ち上がり、ミレンダーを守るように側に動いた。

「確かに『僕達』は異端だ。けれど、僕の世界はここにある。たとえば、お前と作った世界が、美しいものであっても、僕はその世界を愛せない。僕が必要とするものは、全て、ここにあるんだ！」

霧の精霊は、ルウィードの使役する闇の精霊へと躍りかかった。漆黒の中へ霧が混ざる。ミレンダーは再びアレス・プレデターを闇の精霊の方に向けて、引き金を引いた。魔法の力は、意志のないものを受け入れない。精霊に弾丸ではダメージを与えきれないことは分かっていたが、自分と同じヴァンパイアを相手にして弾を無駄に消費するより、まずは頭数を減らす方が先だ。黒い塊が僅かに削れる。

ルウィードは薄い笑みを貼り付けたままだ。

「無駄だよ、ミレンダー」

ゆつくりと、子どもに言い聞かせるような調子にミレンダーは思わず歯を噛み合わせた。

「我が力よ、集え！ > パワー・ボルト 理力破く！」

ルウィードの生み出す完全な理論は、物理的な力としてマナを構成し、霧の精霊へ叩き込まれた。霧の精霊の体が削れ、闇に散る。

殴り合いに徹してもこのままでは押し切られる。

ミレンダーは素早く精霊に命令を下した。精霊は闇の精霊を離して、ルウィードに絡みつく。精霊の力によって、ルウィードの行動と反応を鈍らせるのが狙いだ。

「何!？」

ミレンダーはそのまま軽く後ろに飛び退き、ルウィードの背後のエレベーターに向けて手榴弾を放った。

狙い通りの位置に落ちた手榴弾は、次の瞬間に爆発した。目を閉じ、耳をふさぐが、尚重い音が短い間聴力を奪う。ばらばらと壁が崩れる音が続いた。爆発と壁の破壊の衝撃に挟まれれば、無事ではすまない。少なくとも、普通の生物ならば。

どれほどのダメージを与えられたか。

たとえば、脊髄を粉々に碎かれ、脳髓を刻まれたら、いくら再生く能力が高いとはいえカバーしきれず死に至る。だが、元々身体能力の高いヴァンパイアは、まず、そんな状況には陥らない。

ミレンダーは、すぐに回復した視力で爆発後の様子をうかがった。煙の中に男は再び現れた。しかし、高級ブランドのスーツは千切れ、髪はべったりと塗れ、腹は裂けていた。右腕は肘よりほぼ皮一枚で繋がって垂れ下がり、足を妙な方向へ引き摺っている、が、ルウィードは、死んではいなかった。しかも、この一見致命的な肉体の損傷は、ルウィードが一步踏み出す度に、驚異的な速度で元に戻っていく。元に戻らぬのは、汚れきって乱れた髪の毛と破れた服だけで、その不均衡さが余計に不気味だ。

ミレンダーは思わず後ろに下がった。

「……お前は相変わらず、やんちゃが過ぎる子だねえ」

「……お前、は」

ルウィードは顔を歪めて笑った。紳士然とした振る舞いはとうに消えて、狂気すらかいま見える。ミレンダーは初めて恐怖を覚えた。「役に立たないおもちゃだ」

ルウィードとゆっくりとミレンダーに歩み寄りながら、僅かに残った霧の精霊を握り潰した。

「そう、確かにお前はオリジナルだ。立場から言えば、お前は私の親であり、偉大な先駆者でもある。ただね、」

闇の精霊が突如、ミレンダーへ襲いかかった。抵抗を試みるが、恐怖に萎えた意志では満足にいかない。よろめいたところを、絡みつかれた。元素精霊は一度犠牲者を捕らえると、自分の物質へ取り込もうとする性質がある。ミレンダーの今の状態では、絡みついた精霊を叩き飛ばすことは無理だった。

「……！」

闇に視界を遮られ、緩やかに、だが、逃れられぬ力で首を絞め上げられる。

「……ルウィード」

「それはすなわち、古くさい、時代遅れの産物、というわけだ。要するに、戦車とミサイルを相手にしていればよかったのだよ、お前は。だが、今はそうはいかない。人間が人間の限界を超えて既に20年以上、今こそ、生物を越えなければ、支配者にはなれないのだ」組織に属する一個人がそれほど狂っているわけではなかったはずだった。だが、組織として 世界を視野に入れた大企業としての地位を得た時、全てが狂ってしまった。今となつては、何故あの忌まわしき東京紛争が勃発したのか、誰も正確には分からない。大企業の利権争いが、市民を含めた大勢の犠牲と、東京の破壊を招く戦争にまで発展したのか、誰も分からないのだ。そして何故、朝倉の何の地位もなかった若い社員である自分が「兵器」として、ウイルスに感染させられたのかも、分からない。

これだけの犠牲を払ってもまだ、あらゆる組織は未だに抗争を繰り広げている。紛争時と違うのは、抗争が地下に潜る傾向になったというだけだ。

それは本当に人々が望むことなのか？

東京を支配できたとして、何が満たされるのだろう。元々、狂宴<は、東京紛争以後、大企業の犠牲になった労働者達の集まりだった。それが、今、かつての東京紛争を繰り返し、かつての朝倉と渚のように、己の支配圏を拡充しようとしている。人を食い潰して人を越えることが、人の望みを叶えることになるのだとは、思えない。事実がたとえそうだとしても、そんなことは信じられない。

「……お前は……間違っている」

「力を失ったものの戯れ言など通用しないよ、ミレンダー。お前の力は半端過ぎる。精霊は使役できるが、呪文は使えない。銃は撃てるが、身体は脆い。だが、完全な私と共に歩めば道は開ける。さあ、改めてお前の答えを聞こう」

「……クソ食らえ」

ルウィードは、大仰に溜息をついて、首を振った。そして捕らえ

られて動けぬミレンダーの側に近寄り、その下顎を持ち上げた。ミレンダーは次の行動に予測がついたので、思わず唇を噛み締める。

「……聞き分けがないのなら、仕方あるまい。私の力となれ！」

鈍い音とともに重い痛みが首筋に走った。噛みつかれ、自分の精力を吸収される。同じヴァンパイア同士、人間相手の面倒な手順は必要ない。人間がヴァンパイアを殺すことは難しいが、「同族同士」なら簡単だ、より強い者しか生き延びられない掟は同じだからだ。精力を全て奪われ、エネルギーが枯渇すれば、どれほど再生能力が高かろうと普通の人間と同じように命はない。

「う……っ」

冷たかった身体が急激に熱を持つ。爪先から力が抜けるのと同時に、駆け上がった快樂が思考を痺れさせる。ルウィードを剥がそうと、その背中に爪を立てるが、力が入らないので何の意味もない。生理的な反応で目が潤む。このまま死ぬのかという絶望すら、快樂だった。

「ミレンダー！」

叫び声とともに聞こえた銃声が思考を呼び戻した。次の瞬間、被弾したルウィードの身体が跳ねて、血が降りかかる。ミレンダーは大きく息を吸い、渾身の力を込めてルウィードを膝で蹴り上げた。そして闇の精霊の束縛を、引き剥がす。

「ミレンダー！ 大丈夫か！」

先程の爆発で大きく空いたエレベーターの昇降路から飛び出た長身の男は、そのままミレンダーに駆け寄った。

「フェードさん」

ミレンダーはよろめいて膝をついた。

「……間に合ったか」

「はい」

ほぼ力は奪われたが、ぎりぎり枯渇はしなかったらしい。差し伸



べられた手を取ってミレンダーは立ち上がり、ぎこちなく微笑んだ。

「酷い有様だな」

「すみません、結局巻き込むような形に」

「お互い様だ」

フェードは僅かな空中のきらめきを見上げた。「随分役に立ったぞ、この>霧くは」

元々フェードとは同じチームという訳ではなかった。そもそもミレンダーは、凶悪化したヴァンパイア「鬼」と呼ばれるを始末する>賞金稼ぎくであり、自分と敵の特殊性から、絶対に他人とチームを組むことはなかった。ある仕事がかっけで、フェードのチームと出会い、そして彼らも、また>狂妄くに対して縁があった、というだけに過ぎない。朝倉という亡霊に決着をつける、それは自分の仕事であり、最優先すべきことだった。しかし、ルウィードを始末するにあたって、フェードに声をかけたのは、彼の助力を期待すると共に、彼の仕事に対する助力の意味もあった。それは恐らく、仲間と呼んでいい関係なのだろう。

それぞれの仕事の為に途中で別れたとはいえ、同じ建物にいるのは当然分かっている。爆発があれば、或いは助けに来てくれるかもしれない、と考えたのは甘えだったかもしれないな、とミレンダーは苦笑した。もっとも、彼に霧の精霊をつけておいたのは、純粹に助けるためで、「貸した」つもりではなかった。甘いという意味では、確かにお互い様だ。

ミレンダーは、フェードにつけた霧の精霊に、命令を下して、ルウィードの闇の精霊を攻撃させた。既に先程の戦いで大分削れた闇の精霊は、すぐに取り込まれて四散した。

しかし、ゆらり、とその男は立ち上がった。おびただしい流血によつて既に血に塗れていない箇所などない。髪は逆立ち、目は真っ赤に染まっていた。ルウィードは低い声で笑い始めた。豊富な戦闘経験を持つフェードですら、その様子に思わず目を見張る。

「フェードさん、彼は僕の力の分、強力になっています」

「……加えてお前と同じ『不死』か。夕飯までに帰れると思うか？」  
「正確には『不死』ではありません。ダメージが蓄積すれば、死ぬ可能性もあります」

「……確率論で戦闘はできない」

フェードはサブマシンガンを放り投げて、懐から一振りの短刀を取り出した。火器で戦うこのボディガードにはおおよそ似合わない、銀細工の施された古めかしい短刀だった。

「貸してやる」

ミレンダーが首をかしげて両手で受け取ると、その瞬間に短刀は柔らかな光を放った。

「これは……！」

「俺は昔、部族で育った。それはその時の名残だ。俺は使えないが、お前なら使えるだろう？」

> 武器収束具<。マナの力を取り込む武器であり、魔力を持つ者が使用すれば、莫大な威力を発揮する。そして、その力は、>再生<すら凌駕する。

「但し、見て分かる通り短刀だ。近づかなければ話にならない。俺ができる限りあの化け物を引きつけるから、後はお前でケリをつけるよ」

「ありがとうございます、フェードさん」

「礼を言うのは早すぎるぞ」

フェードはグレネード・ランチャーをマウントしたアサルト・ライフルを構えた。間髪を入れずに引き金を引いてグレネードを発射する。爆破位置は正確だったが、ルウィードは倒れない。

「……私は倒せんぞ！」

肉片を散らしながら立ち上がったルウィードは、低い声で笑った。  
「人間など食われるべき家畜ではないか。身の程を知るがいい。滅びろ！ > <sup>マナ・ホルト</sup>魔力破<！」

凄まじいマナの塊がフェードに向かって放たれる。理力系の魔法とは異なり、精神力に耐性が無ければとても無傷ではいられない。

「>霧くよ、壁に！」

霧の精霊は二人を守護するように形を変え、魔法への障壁となったが、それでも消滅させるまでには至らなかった。

フェードは舌打ちをして、裂けた額からの血を拭いた。「お前の餌になった覚えはないぜ！」

フェードは再度グレネードを発射した。爆風が収まる前に、すぐにアサルト・ライフルをフルオートで連射する。いくら>再生く能力が高くとも、回復までの時間は僅かでも必要だ。並の生物であれば千切れ飛ぶ程の攻撃によるダメージの蓄積は、いくらルウィードとはいえ、元のように動けるまでには時間が必要。

これはまたとない機会だった。ミレンダーは身をかがめ、人間には有り得ない速さでルウィードに走った。ルウィードは右腕と右肩を吹き飛ばされていた状態だったが、近づいてきたミレンダーを見て顔を歪めた。

「何度やつても無駄だ！」

ルウィードが、ミレンダーの肩を恐ろしい力で掴み、再度噛みつきとした瞬間、ミレンダーは左手に持っていた短刀をそのまま突きだした。ルウィードがぐもった声を上げ、己の腹に刺さった短刀を見やる。

「……まさ……か、お前に」

「もう、お前の影には怯えない」

ルウィードはふらふらと後方によるめきながら、しかし顔を上げて再度笑った。

「馬鹿なことを！ お前も我々と変わらぬ化物。私はお前と唯一同じ物だったのに！ お前には最早どこにも行くべき道がないぞ！ お前の『望む』この世界に、お前の存在できる場所などない！」

その言葉に硬直したミレンダーに、ルウィードが襲いかかろうとする。

「黙ってる！」

フェードは、叫んでライフルを連射した。

「私を殺すな、ミレンダー。私を殺せば、お前は永遠に世界から疎外されるぞ」

倒れたルウィードは、ミレンダーに手を伸ばした。思わずミレンダーも右手を差し出す。

「ミレンダー！」

ルウィードが立ち上がりながらその手を掴もうとした瞬間、ミレンダーは左手でアレス・プレデターをホルスターから引き抜いた。過去の全てに決別し、犯した罪を背負う。そんなことは、最初から決めていたではないか。今さらもう迷わない。

「……クソ食らえ」

乾いたピストルの音が、破壊され尽くしたホールに響き、ルウィードは後方に吹き飛ばされた。流れた血は既に血ではなく、崩れた肉体とともに、さらさらと灰へ変わって消えた。

「こういう時に無性にタバコが欲しくなるな」

フェードとミレンダーはホールの壁にもたれて腰を降ろしていた。「申し訳ないですが、僕は持っていますよ。吸えませんか」

「分かっている。俺も禁煙中だ」

ミレンダーは弱々しく笑った。ダメージは癒えているが、あまりに一度に精力を失い過ぎた。あと僅かでも失えば狂気のうちに命を落としてしまう。何よりその為の飢えが酷い。手当たり次第に襲って、相手が死ぬまで吸収し尽くすという衝動に駆られそうだ。

「……ミレンダー」

隣にいる友人ですらその例外ではない。彼はサイバーウェアを精神的限界まで埋め込んでいるから、もし、何か間違いが起きてヴァンパイアに吸収されるようなことがあったら、即死してしまう。ミレンダーは膝を立てて顔を伏せ、自分の腕に爪を立てた。

「辛そうだな」

「……目眩がします」

ミレンダーは息を吐いた。「ルウィードは僕の唯一の理解者だった」

「……俺には唯の利己主義な化物にしか見えなかったが」

「……後悔はしていません。全て自分が選んできたことです、でも……疲れました」

「俺も自分一人で生きていると思っていた。お前の言っていることは正しいよ、ミレンダー。だが、俺には、友人もいれば、まだ、守りたいものもある。一人で生きられると自惚れていたが、彼らに肩を支えて貰って初めて、自分の存在を認められたことに気がついた……たまには頼れよ、その為に俺はいる」

珍しく饒舌なフェードに、ミレンダーは頷いた。「ありがとうございませう、フェードさん」

「あんな化物風情より、俺たちの方がお前の理解者になれるさ。ヒューマンとクリッターにどれだけの違いがあるっていうんだ？人間同士だって理解できない奴はいる」

不思議と、その言葉が偽善だとは思わなかった。文字通り人間の最先端に行くこの男も、別の側面から見れば随分異端なのだ。まっとうな人間ができない影の仕事に就く者である以上、常に社会から絶妙なバランスで疎外される。その中で彼らが「優しい」のは、弱さでなく強さだとミレンダーは思う。

「僕もフェードさんの役に立てたら嬉しいです」

ミレンダーは再度、礼の言葉を言おうとしたが、あることに気がついて言葉を切った。常人ではない自分には、別の危険が迫っている事が分かったのだ。ミレンダーは思わず立ち上がった。

「ミレンダー？」

戦闘用ドローン、その数は10では足りず、100はない。だがドローンだけでなく、生物の匂いもする。>狂宴くが作り上げた、人間以上の能力の生物であることは間違いない。ルウィードの部下の残党か、或いは、残る>代表者くの手のものか。

「フェードさん、新手が階下にいます。こちらへ向かっている」

フェードもまた気がついたのか、サブマシンガンを拾い上げて立ち上がった。「退屈しない数じゃないか」

だが、その言葉にミレンダーは首を振った。

「戦闘用ドローンだ、多分、目標にたどり着くまで追い続ける。ここで二人で戦ったらいつまでも先に行けません。フェードさん、あなたは先に行ってください、僕が相手をします！」

「……冷静に考えよう」

フェードは抑えた調子で言った。「お前にそれだけの体力が残っているのか？ 残ったお前が死んだら、先に行ったところで意味はないぜ」

「僕の体力は休めば回復するようなものではありません。機会さえあればいくらでも強くなれます。僕は元々、一人で多数を相手にするために造られたものです、今なら丁度よく飢えているから、無茶もできます」

「……分かった。ただ、お前は『兵器』である必要はないんだ、それは忘れないでくれ」

ミレンダーはにつこり笑った。「僕はもう、自分の為にしか戦っていません」

「上等だ」

フェードも笑って頷いた。「じゃあ俺は一足先に、『頭』に對面してくるか」

「フェードさん、これ」

ミレンダーが手渡そうとした短刀を見て、フェードは首を振った。

「それはお前が持っていてくれ。どうせ俺には使えない物だしな。その代わり、後で返せよ」

「……分かりました、遠慮無くお借りします」

フェードは頷いてから、ミレンダーに手を出した。ミレンダーは一瞬戸惑ったが、差し出された手を握った。握りかえされた力は、決して、生身の人間のような柔らかさはなかったが、十分血の通った温度があった。

「じゃあ、またな」

「はい」

フェードは踵を返し、飛ぶような勢いでホールの階段を駆け上がつていった。

昔は何も考えていなかった。考えることは許されていなかったし、事実、考えようとすることもなかった。ただの一個の朝倉の兵器、命令に従い、目の前の敵を排除するだけだった。そうでなければ「餌」は与えられなかった。だが、今は多くの手によって支えられて、一人の人として生まれ変わった。与えられた理由の為に戦う必要はなく、己の考えで戦うことができる。たとえそれが誤っていたとしても、受け入れるだけの覚悟はある。

確かに、東京には新しい思想が必要なのかもしれない。だが、もし、>狂宴<の言う「平等」な美しい世界が本当に正しくても、自分がそうでないと信じる限りは戦える。自分にとって正しいのは、自分の為に手を差し伸べる大切な人達が、幸せに暮らす未来なのだ。「……ルウィード、この世界にあなたはいいない。でも」

ミレンダーはアレス・プレデターのクリップを投げて、新しい弾倉を装填した。

「僕は、戦う」

そして、自動音声を発しながら現れたドローンに銃口を向け、引き金を引いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0269e/>

---

The Last Battle

2010年10月8日15時36分発行